フランス語における属詞位置に現れる形容詞付きの無冠詞名詞について

長　沼　圭　一

1．はじめに

次の文は、サン＝テグジュペリの『星の王子さま』の前書きである。

(1)　À Léon Werth.
Je demande pardon aux enfants d'avoir dédié ce livre à une grande personne. J'ai une excuse sérieuse : cette grande personne est le meilleur ami que j'ai au monde. J'ai une autre excuse : cette grande personne peut tout comprendre, même les livres pour enfants. J'ai une troisième excuse : cette grande personne habite la France où elle a faim et froid. Elle a bien besoin d'être consolée. Si toutes ces excuses ne suffisent pas, je veux bien dédier ce livre à l'enfant qu'a été autrefois cette grande personne. *Toutes les grandes personnes ont d'abord été des enfants.* (Mais peu d'entre elles s'en souviennent.) Je corrige donc ma dédicace :
À Léon Werth
quand il était petit garçon.
(SAINT-EXUPÉRY, A. DE, *Le Petit Prince*, p. 5, Gallimard)

この文において、イタリックで示した二箇所は、どちらもコピュラ文の形を呈しているが、属詞位置の名詞の現れ方に違いが見られる。最初のイタリックの部分 Toutes les grandes personnes ont d'abord été des enfants. においては、属詞位置の名詞 enfants は不定冠詞 des を伴って現れている。しかし、もう一方のイタリックの箇所 À Léon Werth quand il était petit garçon. においては、属詞位置の名詞 garçon は無冠詞であり、かつ形容詞 petit を伴っている。果たして、このように形容詞を伴った名詞がなぜ属詞位置に無冠詞で現れることが可能なのであろうか。

2．先行研究

2.1.　文法書における記述

フランス語においては、一般に属詞位置に現れる名詞が職業、身分、国籍を表している場合は無冠詞になるとされている。RIEGEL, PELLAT & RIOUL（1994）は次のように述べている。

> 「主語または目的補語の属詞（On l'a élu *député*—On l'a nommé *général*.—Elle a pris un vieillard pour *amant*）が職業、社会的身分、国籍を表す場合、この属性付与がクラス分けの操作しか行っていなければ限定詞を付けないのが慣例である」[1)]

しかしながら、RIEGEL, PELLAT & RIOUL（1994）は次のように続けている。

> 「補足的な特徴付けまたは限定がこれに加わると、限定詞が再び現れる：Jean est médecin / un bon médecin / le médecin de Pierre—Je suis soldat（単なる身分の限定）/ Je suis un soldat（「その名にふさわしい」）—Gérard est français jusqu'au bout des ongles / est un excellent Français.」[2)]

ここで RIEGEL, PELLAT & RIOUL（1994）が示している、Jean est un bon médecin. や Gérard est un excellent Français. などの例からも分かるように、属詞位置に職業や国籍を表す名詞が現れる場合であっても、形容詞を伴うと、不定冠詞を必要とするのが一般的である。少なくともこれに従うならば、(1) の il est petit garçon も不定冠詞を伴っていいはずである。しかし、言うまでもなく、(1) の il est petit garçon に現れている garçon は「ウェイター」という職業の解釈で用いられているわけではないし、当然のことながら国籍を表しているわけでもない。身分という解釈も少し苦しいであろう。

ここで用いられている garçon のような語については、TOGEBY（1982）が次のように述べている。

> 「Homme, femme, garçon, fille. ——無冠詞で用いられると、これらの語は性質を表す：Elle est très femme—La mère n'était pas femme à se formaliser de ces galanteries（*Orieux*, p. 80）—Elle est légèrement fille—il

était très bel homme quand je suis entré à son service (MOHRT, *Serviteur*, p. 140) —M. Couve de Murville n'est pas homme à se soucier outre mesure des formes (*Figaro*, 20−1−66, p. 1).

不定冠詞と共に用いられると、これらは文法的性を際立たせ、したがって性別を際立たせることになる。次の空想はある少女によって表現されたものである：Si j'étais un garçon, je serais garçon (GATTI, *Enfant*, p. 77)。男性であれば次のように言うであろう：Si j'étais garçon …」[3)]

TOGEBY（1982）は garçon という名詞が職業や国籍を表す語と同様に無冠詞で属詞位置に現れうることを指摘しているにとどまっており、petit という形容詞を伴った場合については言及していない。

2.2. NAGANUMA (2005)

拙論（2005）[4)]においては、femme, homme といった性別を表す語が属詞位置に無冠詞で現れるケースについて分析を行っている。そこでの分析は garçon, fille のような語にも有効であると考えられるため、ここでその分析を取り上げることにする。

拙論（2005）における問題提起は、次の歌の歌詞に見られる例から始まっている。

(2) Moi, *si j'étais un homme,* je serais capitaine d'un bateau vert et blanc, d'une élégance rare et plus fort que l'ébène pour les trop mauvais temps. Je t'emmènerais en voyage voir les plus beaux pays du monde. J'te ferais l'amour sur la plage en savourant chaque seconde où mon corps engourdi s'enflamme jusqu'à s'endormir dans tes bras, *mais je suis femme et, quand on est femme*, on ne dit pas ces choses-là. (DIANE TELL, *Si j'étais un homme*)

この例の最初の部分にこの曲のタイトルでもある si j'étais un homme という表現が見られるが、ここにおいてコピュラ文の属詞位置を占めている un homme は不定冠詞を伴って現れている。しかしながら、その数行下に見られる mais je suis femme et, quand on est femme においては、同じコピュラ文の属詞位置でありながら femme という語が限定詞を伴わずに現れて

いる。

TOGEBY（1982）も指摘しているように、femme という語は、

(3)　Elle est très femme. (TOGEBY, 1982, p. 73)

のような例において無冠詞で現れている。ここで femme は「女らしい」という意味で形容詞的に用いられているが、(2) の femme はこれとは異なり、「女性」ということしか表していない。

この違いについては、RIEGEL（1985）の次のような指摘が示唆的である。

(4)　Pierre est professeur. (RIEGEL, 1985, p. 195)

この文について、RIEGEL（1985）は二通りの解釈が可能であるとしている。一つは「ピエールは教師然としている、教師らしい」という性質を述べる解釈であり、もう一つは「ピエールは教師である」という職業を表す解釈である。この二つの解釈の違いについて、拙論 (2005）では、前者の解釈においては professeur の「性質記述機能」が働いており、後者の解釈においては「役割記述機能」が働いているという分析を行っている。

この違いは、femme にも当てはまることであり、「性質記述機能」が働いている場合は「女らしい」という解釈になるのに対し、「役割記述機能」が働いている場合は「女性」という性別を表しているのである。したがって、(2) に見られる mais je suis femme et, quand on est femme の femme においては、professeur のような職業名が単に職業を表している場合と同様に、「役割記述機能」が働いていると考えられる。

しかしながら、拙論 (2005）においても、形容詞を伴う例については言及するに至っていない。

3．用例分析

(1) の例の他に収集された形容詞付きの名詞が無冠詞で属詞位置に現れている例を以下に示す。

(5)　De toute façon, dans le contexte de majorité plurielle, Voynet ne peut

dénigrer les mérites de la loi Verdeille, dont l'auteur était *sénateur socialiste* ! (*L'Express*, 2463, 17/9/1998, p. 19)

(6) Mais lui [= Vincent Van Gogh], d'où tira-t-il son inspiration ? De Jean-François Millet, le peintre des paysans. Un hommage les réunit pour la première fois sur les cimaises du musée d'Orsay.

Fils de cultivateur, *Millet avait été bon laboureur* et en tirait vanité. (*L'Express*, 2463, 17/9/1998, p. 62)

(7) « Je ne me souvenais pas que *j'étais si bon élève* », commente alors, dans un français parfait et avec un modeste sourire, le diplomate bientôt septuagénaire, en constatant qu'un certain Rohatyn Felix figure en face de la mention « prix d'excellence ». (*L'Express*, 2427, 8/1/1998, p. 80)

(8) En revanche, *j'ai trouvé Christian Blanc excellent comédien dans le film « les Médiateurs du Pacifique »*. Il a beaucoup d'autorité et un genre à la Spencer Tracy. Oui, Christian Blanc est un mec « tracysien ». (*Nouvel Observateur*, 1718, 9/10/1997, p. 51)

(5) における sénateur socialiste は少し特殊な例と言える。統辞的には sénateur が名詞であり、socialiste が形容詞であるということになるが、どちらの語も単独で職業や身分を表す語として用いることができる。すなわち、どちらの語も「役割記述機能」を持っているのである。したがって、この名詞句は、sénateur の中でさらに socialiste に分類される者という下位範疇化を行なっており、名詞句全体でこの下位範疇を表す「役割記述機能」を働かせているために属詞位置に無冠詞で現れていると考えられる。

(6), (7) においては、bon という形容詞を伴った名詞が属詞位置に無冠詞で現れているが、これについては、GREVISSE（1993）において次のように述べられている。

「以下のような場合、通常不定冠詞が置かれる。 1 ）属詞名詞が付加形容詞、またはその他の補語を伴う場合：

Pierre était un Français d'Algérie または … un Français exalté を Pierre était Français（または français）と比較のこと。[…]

たとえ付加形容詞が先行する場合でも、être beau joueur, ne pas être grand clerc のような表現において、そして付加形容詞が bon または

mauvais のときしばしば、冠詞が欠如する：On peut être mauvais fils et bon père, comme on peut être bon fils et mauvais père (H. BAZIN, *Mort du petit cheval*, XXXV). —On n'est pas très difficile, ni très bon juge, sur ce dont on ne se soucie point (PROUST, *À la recherche du temps perdu*, t.I, p. 629).」[5)]

また、GOES（1999）は、CLAUDÉ（1981）の説明を元に、次のような図式を示している。

(9) *grand politicien* = grand *en tant que* politicien (incidence à l'hyponyme) ↔ *politicien grand* = grand *en tant que* « humain » (incidence à l'hyperonyme). (GOES, 1999, p. 92)

(9) における形容詞が前置している名詞句 grand politicien のパラフレーズに従うならば、(6) の bon laboureur は bon en tant que laboureur, (7) の si bon élève は si bon en tant qu'élève となり、実際このように言い換えても解釈はほとんど変わらないと考えられる。ここでは形容詞 bon の支えとなっている名詞は、形容詞の適用範囲を制限する役割をしていると言える。すなわち、bon laboureur は laboureur という観点において bon であること、bon élève は élève という観点において bon であることを表しているのである。したがって、これらの文において重要なのは、bon という形容詞によって性質を記述することであり、意味解釈上はいわば laboureur, élève の方が bon を限定していると見ることができるであろう。(8) の例においては、excellent comédien という名詞句が直接目的補語の属詞として現れているが、この例は上述の分析を補強しているように思われる。すなわち、trouver という動詞の性質上、直接目的補語の後には評価を記述するような形容詞が現れるわけであり、Christian Blanc という人物が俳優であるという前提があれば、特に comédien という名詞は無くとも全く問題はないはずである。ここで伝えようとしているのは、excellent という性質の記述であり、comédien という名詞はこの記述の適用範囲を制限する働きにとどまっていると言える。これらの例において職業、身分を表す名詞が後景に下がり、いわば脇役に徹している様子は、TOGEBY（1982）が femme, homme の無冠詞の例として示している次のような例にも通ずるところが

あるように思われる。

(10) La mère n'était pas *femme* à se formaliser de ces galanteries (*Orieux*, p. 80, cité par TOGEBY, 1982, p. 73)
(11) M. Couve de Murville n'est pas *homme* à se soucier outre mesure des formes (*Figaro*, 20–1–66, p. 1, cité par TOGEBY, 1982, p. 73)

(10), (11) ともに伝達内容として重要なのは、前置詞 à 以下の記述内容であり、femme, homme という名詞は、この〈à ＋不定詞〉の単なる支えとなっているに過ぎず、実質的な意味はほとんど持っていないと言える。

以上のような観察から、bon や excellent を伴う名詞が属詞位置に無冠詞で現れている例においては、支えとなっている名詞の役割記述機能が後景に下がっており、形容詞の性質記述機能が前面に現れていると考えられる。

しかしながら、(1) の petit garçon は petit en tant que garçon とは解釈しがたく、同じ分析が当てはまらないように思われる。果たしてこの名詞句はどのように解釈すべきであろうか。

4．一つの概念

ここで、形容詞が前置した名詞句の特徴について見ていくことにする。

一般に、複数形の名詞に形容詞が前置している場合、その前に付ける不定冠詞は des ではなく de となる[6)]。

(12) a. un long cheveu
b. *des longs cheveux
c. de longs cheveux (ISHINO, 2004, p. 73)

GREVISSE（1993）においては、次のように述べられている。

「不定冠詞、または部分冠詞としての de（母音の前では d'）
a ）名詞が付加形容詞に先行されている場合
1º 複数形で、通常書き言葉と丁寧な話し言葉において、des は de に変わる（DE bons fruits）。[…]

− De : DE jolies maisons blanches qu'entourent des bosquets (VIGNY, *Cinq-Mars*, I). —Après D'interminables heures d'affût vaines (GRACQ, *Rivage des Syrtes*, p. 129). —Avec DE fortes moustaches (SARTRE, *Mots*, p. 12). —En faisant DE plaisantes grimaces (PAGNOL, *Gloire de mon père*, p. 55). —[…] fit à leur adresse DE grands signes d'amitié (DURAS, *Petits cheveux de Tarquinia*, p. 25)」[7)]

しかしながら、GREVISSE（1993）は次のように続けている。

「形容詞が名詞と共に成句を成している場合（ハイフンがあれば、より確かであるが）、des が要求される：DES grands-pères. DES grands-mères. DES jeunes gens. —DES honnêtes gens (BECQUE, *Corbeaux*, I, 1). —Donnez-moi DES petits pois (LITTRÉ, s.v. *pois*). —Dire DES bons mots (*Dictionnaire de l'Académie*, s.v. *mot*).」[8)]

ここで、(1) の petit garçon に話を戻そう。もしこの名詞句を petits garçons と複数形にして、不定冠詞として des が要求されるならば、この名詞句は全体で一つの概念を表しているということになる。そこで、インフォーマントに、un petit garçon の複数形は何かという質問をしたところ、5 人中 2 人は des petits garçons と答えたが、残りの 3 人は de petits garçons という答えであった。実は、GREVISSE（1993）の記述には次のような続きがある。

「しかしながら、このような場合においても、時折 de が見られることがある：DE nouveaux venus (ALAIN-FOURNIER, *Le grand Meaulnes*, p. 266). —DE petits enfants (SAMAIN, *Chariot d'or*, Matin sur le port). —DE petits garçons (MALÈGUE, *Augustin*, t.I, p. 242). —Une nation capable de produire DE grands hommes (DUHAMEL, *Tribulations de l'espérance*, p. 52). —Des regrets, des promesses, DE demi-aveux (BORY, *Peau des zèbres*, p. 21).」[9)]

ここで de petits garçons の例が例外的なものとして挙げられていることから、petit garçon が全体で一つの概念を成していると一般的に捉えられてい

ることを示唆していると言える。実際、仏和辞典の中には petit garçon を成句として挙げているものもある。

「petit garçon　(1)（12歳くらいまでの）小さな男の子。(2)（能力のない）子供」（『ディコ仏和辞典』，2003，白水社）
「petit garçon　(1) 男の子（2～12，3歳）。(2)（一人前の人間でない）子供」（『クラウン仏和辞典』第6版，2005，三省堂）[10)]

また、その他の仏和辞典においても、petit garçon を少なくとも用例として挙げているものが見られる。

「petit garçon　（12歳くらいまでの）男の子」（『プログレッシブ仏和辞典』第2版，2008，小学館）
「petit garçon　男の子（12歳ごろまで）」（『プチ・ロワイヤル仏和辞典』第3版，2003，旺文社）

確かに、Grevisse（1993）や仏和辞典における記述から、petit garçon が全体で一つの概念を表しているという見方も可能かもしれない。しかしながら、petit garçon を petit pois「グリーンピース」と比べてみると、そこには大きな違いがあるように思われる。というのも、petit garçon の複数形 petits garçons に付ける不定冠詞についてはインフォーマントの間で de にするか des にするかで揺れが見られるが、petit pois の複数形 petits pois については不定冠詞 de を付けることを選ぶフランス語話者はまずいないと考えられるからである[11)]。この違いは恐らく、petit pois が「グリーンピース」の意味で用いられている場合、明らかに単なる pois「マメ」とは違った新たな一つの概念となっているのに対し、petit garçon は必ずしも garçon とは違った何か新たな概念を表現しているとは言いがたいというところから来ているのではないかと推測される。では、petit garçon に現れている形容詞 petit は一体どのような働きをしているのであろうか。

5．二種類の形容詞

Goes（1999）によると、次に示すように、形容詞を二つのタイプに分

類することが可能である。

(13)　bon—très bon *vs*. présidentiel—*très présidentiel (GOES, 1999, p. 73)

すなわち、形容詞は副詞 très と共起するものとしないものに分けられ、それにより程度の概念を含意するか否かが分かる。このような基準により、形容詞は、もっぱら性質を表すもの（qualificatif）と、もっぱら関係を表すもの（relationnel）とに区別することができる、と GOES（1999）は述べている[12)]。

(1) の petit garçon の petit は、無論 très petit と全く問題なく言うことができるため、性質を表す形容詞であることが分かる。しかしながら、性質を表すか、関係を表すかという区別は、個々の形容詞に内在的に備わっているものなのであろうか。

ここで、筆者はフランスでのある体験を引用したいと思う。タバコ屋でテレフォンカードを買おうとしたところ、« Petit ? Grand ? » という質問が返ってきた。上述のとおり、通常 petit, grand のような形容詞は性質を表し、très petit, assez grand のように程度を表す語と共起する。しかし、ここでは、テレフォンカードが例えばクレジットカードサイズか、写真の L 判サイズかという次元の物理的な大きさが問題となっているわけではない。テレフォンカードには度数が50のものと120のものの二種類があり、前者を petit, 後者を grand と言って区別しているに過ぎない。この場合の petit と grand は、性質を表す形容詞として用いられているのではなく、むしろ関係を表す形容詞に準ずるものとして用いられていると考えられる。すなわち、少なくともテレフォンカードに関する petit と grand は、段階的変化 (gradation）を一切含意せず、境界線のはっきりした二つのカテゴリーを表すことにより、テレフォンカードの分類を行っているのである。これは、élection présidentielle の présidentielle, parents maternels の maternels といった形容詞と同様の働きであり、程度の概念が入る余地はない。

(1) に現れている petit garçon の petit も同じ働きをしていると言える。男性の成長過程を極端に単純化すると、bébé → garçon → homme のような図式が考えられる。ここに現れている bébé, garçon, homme という語は、男性の年齢に応じたカテゴリーを示している。このカテゴリー化は、médecin, professeur, avocat のような職業を表す語や、Français, Japonais,

Américain のような国籍を表す語が行っているのと同じ働きである。そして、petit garçon の petit は、garçon をさらに分類するために用いられている修飾語であり、petit garçon 全体で新たなカテゴリーを形成しているのである。この petit garçon は、garçon の下位範疇として、例えば jeune garçon のような表現とパラダイムを成しているのである。仏和辞典で jeune garçon を調べてみると、以下のような記述が見られる。

「jeune garçon　(14–18歳くらいの) 少年」(『プログレッシブ仏和辞典』第 2 版，2008，小学館)
「jeune garçon　少年、若者 (18歳ごろまで)」(『プチ・ロワイヤル仏和辞典』第 3 版，2003，旺文社)
「jeune garçon　(思春期以降の) 青年、若者」(『ディコ仏和辞典』，2003，白水社)
「jeune garçon　少年、若者」(『クラウン仏和辞典』第 6 版，2005，三省堂)

少なくとも二つの辞書においては、jeune garçon の記述の中に具体的な年齢の言及が見られる。このことから、jeune garçon という名詞句が境界線を持ったカテゴリーを示していると言える。既に見た petit garçon の記述の中でも具体的な年齢が挙げられていたことから、petit garçon も同様にカテゴリーを表していることが分かる。したがって、(1) の例において petit garçon という形容詞付きの名詞が属詞位置に無冠詞で現れているのは、全体で一つのカテゴリー概念を形成しており、職業や国籍を表す名詞句と同様に、役割記述機能が働いているからであると考えられる。

このように形容詞を付加することにより下位範疇を示すという説明は、(5) の sénateur socialiste にも当てはまることである。既に上述したとおりであるが、上院議員という範疇のうち、社会主義であるものという下位範疇を示し、この名詞句全体で役割記述機能を働かせることにより、属詞位置に無冠詞で現れていると考えられるのである。

6．無冠詞と不定冠詞

ここで (1) におけるもう一つの疑問について考えてみよう。

(14) […] *Toutes les grandes personnes ont d'abord été des enfants*. (Mais peu d'entre elles s'en souviennent.) Je corrige donc ma dédicace :
À Léon Werth
quand il était petit garçon. [= (1)]

イタリックの部分に注目すると、同じ属詞の位置に現れていながら、最初の文では enfants に不定冠詞が付いており、最後の文では petit garçon には何も限定詞は付いていない。この違いは何を意味しているのであろうか。

先行研究において取り上げられている属詞位置での不定冠詞付き名詞と無冠詞名詞のミニマルペアーの例をいくつか観察してみることにする。PICABIA（2000）は、属詞位置の sauveur「救い主」と sauveteur「救助隊員」に着目し、以下のように説明している。

(15) a. Paul est *un sauveur*.
b. *Paul est *sauveur*. (PICABIA, 2000, p. 82)
(16) a. *Paul est *un sauveteur*.
b. Paul est *sauveteur*. (*ibid.*, p. 83)

「これらのペアーが示しているのは、形容する名詞が外的なラベルとしての機能を持つ場合は、限定詞が付かないということである（(47b) [= (16b)] の容認度と (46b) [= (15b)] の非容認度を参照）。一方、名詞が内的、定的形容としての機能を持つ場合は、不定冠詞 un を要求する（(46a) [= (15a)] の容認度と (47a) [= (16a)] の非容認度を参照）」[13)]

また、PICABIA（2000）は、次の例においても、上記のような区別が観察されることを述べている。

(17) a. Paul est *Français*.
b. Paul est *un Français*. (*ibid.*)

「もしポールがフランス国籍を持っていることを話者が主張したいのであれば、そのときは (50a) [= (17a)] が期待される文である。しかし、ポールがアメリカに移住し、そこで、例えば、バスク風のベレー帽、

バゲット、フランス産のチーズやワインなど、フランス人の典型であると想像される特徴を示すとすれば、そのときは (50b) [= (17b)] が自然と期待される文である」[14)]

PICABIA（2000）はコピュラ文の属詞として現れる Ø N と un N について次のようにまとめている。

「要するに、記述文の記述機能を担う Ø N は、主語の外的特性を示している。職業を表す名詞 (être plombier, sauveteur, professeur, jockey, …) は、際立ってラベルとなることが期待される述語である。一方、un N は、主語がその元の一つを成している対象の集合を定義付ける、内的特性を示している」[15)]

さらに、PICABIA（2000）は外的特性か内的特性かによる Ø N と un N の区別が、修飾語句を伴う場合にも有効であることを次の例によって示している。

(18) a. Paul est sauveteur.
b. Paul est sauveteur alpin / sauveteur de mer. (*ibid.*)

「外的特性として解釈される名詞述語は、例えば弁別的な形容詞によって修飾された場合、ゼロ冠詞[16)]を要求するであろう」[17)]

そして (19) の例とともに次のように続けている。

(19) a. Paul est un sauveteur émérite.
b. *Paul est sauveteur émérite. (*ibid.*)

「この同じ述語が記述的形容詞によって修飾されると記述的になり、ゼロ冠詞が禁止される。その際、特性は内的で、個体を定義付けるものとして解釈される」[18)]

このような PICABIA（2000）の分析から、(14) の il était petit garçon におけ

る petit は、記述的ではなく、弁別的に働いており、petit garçon 全体で外的特性を表し、ラベル的な機能を持っていると言える。

KUPFERMAN（1991）も、PICABIA（2000）と同様、属詞位置の Ø N が外的、一時的述語に対応し、un N が内的、定的述語に対応していると述べているが、さらに次のような興味深いことを指摘している。

> 「人に関しては、下位集合の名称は社会的・文化的区別を表している」[19)]

そして、この社会的・文化的区別を表している下位集合の名称こそが、属詞位置に現れた場合に無冠詞になるのである。次の例を見てみよう。

(20) Paul est *Ø Africain / Ø Américain.
Max est Ø Sud-Africain / *Ø Sud-Américain.
Luc est un Africain.
Sam est un Sud-Américain. (KUPFERMAN, 1991, p. 70)

すなわち、Américain, Sud-Africain は社会的区別である国籍として存在しているため役割記述機能を持ちうるのに対し、Africain, Sud-Américain は大陸という地理的、自然発生的なものに基づいた名称であるため、特別な文脈が与えられない限り役割記述機能を持つことはできないのである。

役割記述機能は、職業、国籍、肩書き以外のものであっても条件さえ整えば働きうるものである。例えば、KUPFERMAN（1991），PICABIA（2000）は以下のようなことを指摘している。(21) が示すように、fumeur という語は通常属詞位置においては限定詞を必要とする。

(21) Ce garçon est * Ø / un fumeur. (KUPFERMAN, 1991, p. 69)

喫煙家であるか否かは社会的・文化的区別とは無関係であるため、役割記述機能が働かないからである。しかしながら、飛行機や列車の座席について話している場合には、(22) のように fumeur が属詞位置に無冠詞で現れうる。

(22)　Ce passager est Ø fumeur / non-fumeur. (*ibid.*)

この場合には、「喫煙席」と「禁煙席」という社会的区分が生じ、役割記述機能が働くからである。

拙論（2005）では、このような社会的・文化的区別という解釈による無冠詞名詞化が性別を表す語にも当てはまることを指摘している。

(23)　a. Je suis *femme*.
　　b. Je suis *une femme*.

すなわち、(23a) のような無冠詞での発話においては、社会的・文化的に人を分類する意図が働いており、性別に基づくクラス分けが示唆されているのに対し、(23b) のような不定冠詞付きの発話においては、社会的・文化的区別の意図はなく、実体として女性であること、あるいは生物学的に女性であることが示されているのである。

Togeby（1982）において、女の子なら Si j'étais un garçon と言うのに対し、男性であれば Si j'étais garçon と言うという記述があるが、これは Togeby（1982）が主張するような、不定冠詞を付けることに性別の違いを際立たせる効果があるからではない。まず、男性が garçon を無冠詞で発話できる理由は、次のように説明できるであろう。既に述べたように、男性の成長過程を極端に単純化させると bébé → garçon → homme のように図式化できる。これらの bébé, garçon, homme といった名称は人の下位範疇を表している。これらの名称は、本来生物学的観点から与えられているものであるが、社会的・文化的区別として捉えることも可能である。すなわち、男性は、bébé であるか、garçon であるか、homme であるかに応じて、社会的に期待されることが異なるのであり、したがって外的要因によるカテゴリー化が行われるのである。この中に garçon としてカテゴリー化される時期が存在し、大人の男性にとっては、この時期を現実のものとして過ごしているため、garçon という語に役割記述機能を持たせることが容易であると推測される。それに対して、女性にとって garçon というカテゴリーは現実的に所属することのできるカテゴリーではないため、un garçon という自分とは全く別の個体を導入し、それと同定することによって、仮想的に提示するのがより自然なやり方となるのであろう。しかしながら、以

下の例から分かるように、必ずしも TOGEBY（1982）が示しているような区別がはっきりと存在するわけではない。

(24) Si j'avais été *homme* ça m'aurait été impossible d'en [= de ces femmes] préférer aucune. (BEAUVOIR, *Mandarins*, p. 343, cité par 朝倉, 2005, p. 65)
(25) J'en aurais fait autant que toi si j'avais été *un homme*. (BEAUVOIR, *Mandarins*, p. 347, cité par 朝倉, 2005, p. 66)

(24) も (25) も女性による発話として記述されていると考えられるが、(24) では homme という無冠詞名詞が、(25) では un homme という不定冠詞付きの名詞句が用いられている。朝倉 (2005) は、この二つの例において「冠詞の有無による陰影の差ははなはだ微妙である」としているが、やはり無冠詞の場合には社会的・文化的性を表し、不定冠詞付きの場合には生物学的性を表しているという違いがあると考えられる。すなわち、(24) の発話者は自分自身の社会的身分としての性別が女性ではなく男性という属性であった場合を仮定しているのに対し、(25) の発話者は自分自身が男という完全に別の実体であった場合を仮定していると解釈することができるのである。このような解釈の違いには、コピュラ文の機能の相違も大きく関与している。すなわち、(24) は主語の「役割」を付与する「記述文」であり、(25) は主語の「値」を導入する「同定文」であるという違いがあるのである[20)]。

また、架空世界の記述については、KUPFERMAN（1991）も言及しており、述部が全ての可能世界において確認される特性ではなく、ある一つの世界においてのみ真である状態を表している場合、Ø N が現れるとしている。

(26) Paul / Fido voulais être Ø chat.
Et si vous étiez Ø chimpanzé… ?
Izuno voulait être Ø / ??un calife à la place d'Haroun.
Croc-Blanc croyait être Ø loup. (KUPFERMAN, 1991, pp. 68–69)

「ここでは chat, chimpanzé, calife, loup は可能世界におけるクラスの名称（ラベル）を表しており、いかなる個別の個体も割り出されていない。したがって、叙述はこれらのクラスの特徴的な特性から独立し

ている。Paul / Fido voulait être un chat は無論「『ネコ』のクラスの可能世界の中にポール、フィドーがなりたい個体がある」のように注釈をつけることができ、それゆえネコの外延の中にいるわけであるが、加えてとりわけ、ポール、フィドーがこのクラスに共通の特性、すなわちネコの内包を所有したいと思っていることを表している。(67) [=(26)] の最初の例においては事情が全く異なる。ここでは、種の名称が、概念の記述内容とは独立して、可能となっているのは、その名称がある一つの可能世界に位置付けられており、それゆえ一時的であり、出来事にかかわるものであるからに過ぎないのである」[21)]

すなわち、(26) における属詞位置の無冠詞名詞は、クラスの名称を表すラベルとしての機能しか持っておらず、職業、国籍、肩書きを表す名詞と同様、役割記述機能が働いていると言える。さらに、KUPFERMAN（1991）は、現実世界と区別された可能世界が構築されれば、どんなものでも種の名称として機能しうることを次のような例とともに示唆している。

(27) Tu seras Ø pierre.
Citrouille, sois Ø carrosse ! (*ibid.*, p. 69)

このように、架空の世界において何になるかは、必ずしも他の個体を想定することなく、役割の変化だけを問題にしうるため、属詞位置に無冠詞名詞という形で現れることが容易なのであろう。例えば、(27) の後者の文は、カボチャに対して馬車の役割を果たすことを命じているだけであり、場合によっては、巨大なカボチャの中身をくりぬいて馬車として利用するのであっても、この発話の要求は満たされることになるのである。

以上のような考察から、Si j'étais un garçon と Si j'étais garçon の違いは、女性の発話か男性の発話かの差ではないことが分かる。Si j'étais un garçon が自分とは違うある個体を想定しているのに対し、Si j'étais garçon は役割の変化のみを問題にしているという点が異なるのである。

最後にこの章の冒頭で取り上げた疑問について確認しておこう。

(28) […] *Toutes les grandes personnes ont d'abord été des enfants*. (Mais peu d'entre elles s'en souviennent.) Je corrige donc ma dédicace :

À Léon Werth
quand il était petit garçon. [= (1), (14)]

この例の最初の文においてコピュラ文の属詞位置に des enfants という不定冠詞付きの名詞が現れているのは、「子供」という役割としてではなく、具体的な個々の「子供」という存在として捉えているからであると考えられる。一方、最後の部分でコピュラ文の属詞位置に petit garçon が無冠詞で現れているのは、ここでは Léon Werth という人物が生きてきた時間の流れのうち、petit garçon という名称で呼ばれうるカテゴリーに属していた時期のことを問題にしているのであり、petit garçon という〈形容詞＋名詞〉の形全体で役割記述機能が働いているからであると考えられる。

7．おわりに

属詞位置に現れる無冠詞名詞は、典型的には職業、身分、国籍、肩書きなどを表す名詞であり、このような名詞であっても形容詞を伴う場合は一般に不定冠詞を伴う。

ところが、名詞そのものの性質とは無関係に、形容詞を伴っているにもかかわらず、無冠詞で現れる名詞句が存在する。このような名詞句は大きく分けて二つに分類することができる。

一つは、bon, excellent のような主観的評価を表す形容詞を伴った名詞句であり、この場合は、名詞の実質的意味が薄れており、形容詞の性質記述機能が優先されているために無冠詞となっていると考えられる。

もう一つは、形容詞が名詞の表すカテゴリーを分割する働きをしており、形容詞と名詞の組み合わせにより新たな下位範疇を形成している名詞句である。この場合には、名詞句全体で客観的基準によって設けられた境界線を持つカテゴリーを表しており、その結果、職業、身分、国籍、肩書きなどを表す名詞と同様、役割記述機能を働かせることにより、属詞位置に無冠詞で現れているのである。

注

1）« Lorsque l'attribut (du sujet ou du complément d'objet : *On l'a élu député—On l'a*

nommé général. —*Elle a pris un vieillard pour amant*) désigne une profession, un rôle ou un statut social, une nationalité, l'absence de déterminant est de règle si cette attribution n'a pour rôle que d'opérer un classement […] » (RIEGEL, PELLAT & RIOUL, 1994, p. 165)

2）« […] ; dès que s'y ajoute une caractérisation ou une détermination supplémentaire, le déterminant réapparaît : *Jean est médecin* / *un bon médecin* / *le médecin de Pierre*—*Je suis soldat* (simple détermination d'un statut) / *Je suis un soldat* (« digne de ce nom ») —*Gérard est français jusqu'au bout des ongles* / *est un excellent Français*. » (RIEGEL, PELLAT & RIOUL, 1994, p. 165)

3）« *Homme, femme, garçon, fille*. —Employés sans article, ces mots expriment la qualité : *Elle est très femme*—*La mère n'était pas femme à se formaliser de ces galanteries* (Orieux 80) —*Elle est légèrement fille*—*il était très bel homme quand je suis entré à son service* (Mohrt, Serviteur 140) —*M. Couve de Murville n'est pas homme à se soucier outre mesure des formes* (Figaro 20−1−66, 1).

Employés avec l'article indéfini ils mettent en relief le genre, et par là, le sexe. La réflexion suivante est exprimée par une fillette : *Si j'étais un garçon, je serais garçon* (Gatti, Enfant 77). Un homme dirait : *Si j'étais garçon* … » (TOGEBY, 1982, pp. 72−73)

4）この論文は、拙論（2002）を元に性別にかかわる語に注目して再考した拙論（2003）を発展させたものである。

5）« On met ordinairement l'article *indéfini* 1) quand le nom attribut a une épithète ou un autre complément :

Comp. *Pierre était* UN *Français d'Algérie* ou … *un Français exalté* à *Pierre était Français* (ou *français* : § 98, *a*. 3º). […]

Si l'épithète précède, l'art. manque dans des expressions comme *être beau joueur*, *ne pas être grand clerc* et souvent quand l'épithète est *bon* et *mauvais* : *On peut être mauvais fils et bon père, comme on peut être bon fils et mauvais père* (H. BAZIN, *Mort du petit cheval*, XXXV). —*On n'est pas très difficile, ni très bon juge, sur ce dont on ne se soucie point* (PROUST, *Rech.*, t.I, p. 629). » (GREVISSE, 1993, p. 876)

6）前置形容詞を持つ複数形の名詞の前に付く不定冠詞について詳しくは ISHINO（2004）を参照のこと。

7）« *De* (*d'* devant voyelle) comme article indéfini ou partitif.

a) Quand le nom est précédé d'une épithète.

1º Au pluriel, *des* est remplacé par *de* (DE *bons fruits*) ordinairement dans la langue écrite et aussi dans la langue parlée de type soigné. […]

− *De :* DE *jolies maisons blanches qu'entourent des bosquets* (VIGNY, *Cinq-Mars*, I). —*Après* D'*interminables heures d'affût vaines* (GRACQ, *Rivage des Syrtes*, p.

129). —*Avec* DE *fortes moustaches* (SARTRE, *Mots*, p. 12). —*En faisant* DE *plaisantes grimaces* (PAGNOL, *Gloire de mon père*, p. 55). —[…] *fît à leur adresse* DE *grands signes d'amitié* (DURAS, *Petits cheveux de Tarquinia*, p. 25) » (GREVISSE, 1993, p. 871)

8）« Lorsque l'adjectif forme avec le nom une véritable locution (à plus forte raison, s'il y a un trait d'union), *des* s'impose : DES *grands-pères*. DES *grands-mères*. DES *jeunes gens*. —DES *honnêtes gens* (BECQUE, *Corbeaux*, I, 1). —*Donnez-moi* DES *petits pois* (LITTRÉ, s.v. *pois*). —*Dire* DES *bons mots* (AC., s.v. *mot*). » (GREVISSE, 1993, p. 872)

9）« Cependant, même dans ce cas, on trouve parfois *de* : DE *nouveaux venus* (ALAIN-FOURNIER, *Gr. Meaulnes*, p. 266). —DE *petits enfants* (SAMAIN, *Chariot d'or*, Matin sur le port). —DE *petits garçons* (MALÈGUE, *Augustin*, t.I, p. 242). —*Une nation capable de produire* DE *grands hommes* (DUHAMEL, *Tribulations de l'espérance*, p. 52). —*Des regrets, des promesses,* DE *demi-aveux* (BORY, *Peau des zèbres*, p. 21). » (GREVISSE, 1993, p. 872)

10）ただし、petit garçon がこれらの辞書において成句として挙げられているのは、(2) の意味によるところが大きいと考えられる。

11）無論、この petits pois が「小さいマメ」を意味するならばこの限りではない。

12）ただし、GOES（1999）も指摘しているように、parfait, exceptionnel, extraordinaire, incomparable などの極致を表す形容詞も très とは共起しないことを付け加えておく。

13）« Ces paires montrent qu'un nom qualifiant dont la fonction est d'être une étiquette externe est non déterminé (voir l'acceptabilité de (47b) *vs* l'inacceptabilité de (46b)). En revanche, les noms qui ont pour fonction d'être des qualifiants internes, stables, demandent le déterminant *un*—(voir l'acceptabilité de (46a) *vs* l'inacceptabilité (47a)). » (PICABIA, 2000, p. 83)

14）« Si le locuteur veut insister sur le fait que Paul a la nationalité française, alors (50a) est la phrase attendue. Mais Paul pourrait avoir émigré aux Etats-Unis, et exhiber ce que l'on imagine être des traits prototypiques du Français, tels que béret basque, baguette de pain, fromages et vins de France, alors (50b) est la phrase naturellement attendue. » (PICABIA, 2000, p. 83)

15）« En résumé, *Ø N* en fonction prédicative d'une phrase prédicationnelle, dénote une propriété externe du sujet. Les noms de fonction (*être plombier, sauveteur, professeur, jockey*, …) sont par excellence les prédicats attendus pour être des étiquettes. *Un N* en regard, dénote une propriété interne, définitionnelle d'une classe d'objets dont le sujet est un des éléments. » (PICABIA, 2000, p. 83)

16）果たして「ゼロ冠詞」というものが存在するかについては議論の余地があ

るが、ここでは不問に付す。

17）« Un prédicat nominal lu comme une propriété externe, expansé par un adjectif distinctif par exemple, demandera le déterminant zéro » (PICABIA, 2000, p. 83)

18）« Ce même prédicat qualifié par un qualifiant descriptif devient descriptif et le déterminant zéro est interdit. La propriété est alors lue comme interne, définitionnelle de l'individu » (PICABIA, 2000, p. 83)

19）« Chez les humains, les désignations de sous-ensembles renvoient à des distinctions socio-culturelles. » (KUPFERMAN, 1991, p. 69)

20）「記述文」と「同定文」については、坂原（1990）を参照のこと。

21）« On voit bien qu'ici *chat*, *chimpanzé*, *calife*, *loup*, sont des désignations (étiquettes) de classes dans des mondes possibles dont aucune occurrence particulière n'est repérée et donc que la prédication est indépendante des propriétés caractéristiques de ces classes. *Paul* / *Fido voulait être un chat* se gloserait bien sûr par « il y a une occurrence dans un monde possible de la classe *chat* que Paul / Fido voulait être », donc être dans l'extension de *chat*, mais aussi et surtout que Paul / Fido veut posséder les propriétés communes de cette classe, s'approprier son intension. Rien de tel dans le premier exemple de (67). Ici, la désignation d'espèce, indépendamment du contenu descriptif du concept, n'est possible que parce qu'elle se situe dans un monde possible, donc est précaire, événementielle. » (KUPFERMAN, 1991, p. 69)

参考文献

CLAUDÉ, P. (1981) : « La relation adjectif-nom (en français et en anglais) », *L'information grammaticale*, n° 11, pp. 11–18.

GOES, J. (1999) : *L'adjectif. Entre nom et verbe*, Duculot, Paris & Bruxelles.

GREVISSE, M. (1993) : *Le bon usage* (13e éd.), Duculot, Paris & Louvain-la-Neuve.

ISHINO, K. (2004) : « Fonction de l'article indéfini « de » dans le syntagme « de longs cheveux » et de l'antéposition de l'adjectif en français : le point de vue du fonctionnalisme et de la théorie de l'information », *Integrative Studies on Essential Properties of Human Language by Theoretical Linguistics, Functional Linguistics, and Cognitive Neuroscience*, Tokyo Metropolitan University, pp. 72–85.

KUPFERMAN, L. (1991) : « Structure événementielle de l'alternance UN / Ø devant les noms humains attributs », *Langages*, n° 102, pp. 52–75.

NAGANUMA, K. (2005) : « Les syntagmes nominaux sans déterminant en position attributive dans une phrase copulative : à propos de la fonction de description de rôle », *Studies in Foreign Language Education*, n° 27, Foreign Language Center,

University of Tsukuba, pp. 107−116.

PICABIA, L.（2000）: « Appositions nominales et déterminant zéro : le cas des appositions frontales », *Langue française*, nº 125, pp. 71−89.

RIEGEL, M.（1985）: *L'adjectif attribut*, Presses Universitaires de France, Paris.

RIEGEL, M., J.-C. PELLAT & R. RIOUL（1994）: *Grammaire méthodique du français*, Presses Universitaires de France, Paris.

TOGEBY, K.（1982）: *Grammaire française, Volume I : Le Nom*, Akademisk Forlag, Copenhague.

朝倉季雄（2005）:『フランス文法集成』，白水社.

坂原茂（1990）:「同定文・記述文とフランス語のコピュラ文」，『フランス語学研究』，nº 24，日本フランス語学会，pp. 1−13.

長沼圭一（2002）:「コピュラ文の属詞として現れる無冠詞名詞句」，『筑波大学フランス語・フランス文学論集』，nº 17，筑波大学フランス語・フランス文学研究会，pp. 153−187.

長沼圭一（2003）:「役割記述機能を持つ無冠詞名詞句について—quand on est femme, on ne dit pas ces choses-là—」，『フランス語フランス文学研究』，nº 83，日本フランス語フランス文学会，pp. 90−100.

A propos des substantifs à adjectif sans déterminant apparaissant en tant qu'attributs en français

Keiichi NAGANUMA

Lorsque les substantifs à adjectif apparaissent en position d'attribut, ils sont normalement précédés par un déterminant même s'ils représentent une profession ou une nationalité, comme le montrent les phrases suivantes : *Jean est un bon médecin*, *Gérard est un excellent Français*, etc. Cependant, on les trouve parfois sans déterminant comme dans *j'étais si bon élève*, *il était petit garçon*, etc. On peut diviser ce genre de syntagmes nominaux en deux groupes.

Le premier groupe concerne les syntagmes nominaux qui contiennent un adjectif exprimant l'estimation subjective du locuteur, tel que *bon*, *mauvais*, *excellent*, etc. Dans ce cas, c'est la « fonction de description de qualité » des adjectifs qui l'emporte sur la signification essentielle des substantifs. La phrase *j'étais si bon élève* s'interprète en effet comme *j'étais si bon en tant qu'élève*. C'est pourquoi ces syntagmes nominaux à adjectif n'ont pas besoin d'un déterminant en position d'attribut.

Dans les syntagmes nominaux du second groupe, les adjectifs n'ont plus la « fonction de description de qualité ». La phrase *il était petit garçon* ne veut pas dire qu'*il était petit en tant que garçon*. Ici, l'adjectif *petit* ne s'emploie pas pour qualifier la taille d'un garçon, mais pour sous-catégoriser l'ensemble *garçon*. Autrement dit, les *petits garçons*, ainsi que les *jeunes garçons*, constituent une sous-catégorie des *garçons*. Dans ce cas, les syntagmes nominaux à adjectif représentent une catégorie à frontières construites par des critères objectifs et fonctionnent comme les noms simples de professions, de nationalités et de statuts. Il s'agit donc cette fois-ci de la « fonction de description de rôle », ce qui explique que ces syntagmes nominaux à adjectif n'ont pas de déterminant en tant qu'attributs.